

2011年11月から2012年1月までの3か月間インド国マハラシュトラ州ムンバイ市・プネ市・ナシク市・オーランガバッド市の水道事業の現状と将来計画の調査で派遣された。今回は、ムンバイ市の情報について記載する。

ムンバイの都市としての歴史は、1534年にポルトガルがゴジャラートの土侯からこの地域を譲り受けたことに始まる。1661年、ポルトガルのカタリナ王女がイギリスのチャールズ2世と結婚する際、ボンベイ(ムンバイの旧名称)は、持参金としてイギリス側に委譲された。ボンベイ市は、7つの島から成り立っていた。その後埋立事業が開始されインド国の本土とつながり繁栄し、インド最大の都市となった。1995年に英語での公式名称がボンベイ(Bombay)から、現地語(マラーティー語)での名称にもとづくムンバイ(Mumbai)へと変更された。

我々は、ムンバイ市で古いフォート地区に拠点をおいて水道事業の情報収集を行った。

フォート地区の港の近くに、有名なインド門があり毎年多くの旅行者が訪問している。この門と並行して有名なホテル、ター



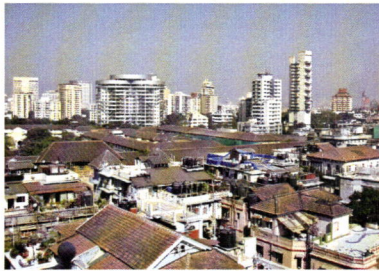
インド門とタージマハールホテル

ジマハールホテルが建設されている。何年か前に爆弾騒ぎがあり、ホテルに入るには厳しいチェックを受けてから入ることになる。

このホテルの周りには昼夜を問わず、警備が厳しく安全なため、多くの市民と外国人が早朝

からウォーキングを行っている。早朝には家のない家族、男性が歩道に薄いシーツを巻いて寝ている光景がよく見られる。昼間は気温も上がるので、観光客が多いが、夜になると夕涼みに来る老人・若いカップル・子連れ親子・観光客が目立つ。馬から台車までキンキラに光った馬車が走っている。時には、若い女性が外国人男性客を誘っている光景も見られる場所である。

男性に聞くと、家族と言っても家が狭く多くの子供と一緒に住んでいるので、旦那の寝る場所が無く、家の軒の下、歩道に寝ていると話してくれた。



旧市街と新市街

ムンバイ市の6割の人々は、スラム街に住んでいる。調査で中に入っても出てくるのが難しいと言われている。何人住んでいるのか、家はどのようかかわからない状況である。昨年実施した国勢調査で、スラム街に住んでいる人々の数をどのようにして数えたのか疑問に思っている。



世界遺産は、ムンバイ市に7か所ある。このフォート地区周辺では、1800年後半から1900年前半に建設された建物を多数見ることが出来る。私も日曜日の朝一番にウォーキングを



世界遺産の駅

兼ねて見てきたが歴史のある建物は今でも目に焼き付いている。

特に一番古いChhatrapati Shivaji Terminus駅の建物は世界遺産に登録されている。何回か電車に乗ったが、電車の中でも男女一緒と、女性だけの車両に分かれている。乗っているときのマナーは良いが、降りる時のマナーの悪さには唖然とした。降りるときは我先、乗るときは降りる人より先に乗り込む光景がいたるところで見受けられた。



駅で電車を待っている人々

市内の交通手段は、タクシーか乗り合いバスが一般的だが、朝夕は通勤ラッシュで大変混雑している。電車を見ても出入り口のドアはなく、オープン式ですから旅客たちは、体を半分以上外に出して乗っている。

インドでは、宗教の違いはあるが、11月から1月にかけて多くの結婚式が行われる。この時期は気候も良くこの州でも行われる。私もニューデリー市・ナシク市・プネ市・ムンバイ市で見えてきた。披露宴は、会費制が多く一般の人でもお金を支払えば参加できる。私も1,000ルピア支払って参加した。宗教上のしきたりがあるが、お祝いの席上では皆一緒という感じだった。結婚式典は、午後8時ごろから始まり、食事をしながら楽しんでいった。夜11時頃になると太鼓をたたいて踊りが始まり、花火を上げたりして永延と続く。若いカップルが誕生する光景はどこに行っても気持ちは一緒だと感じた。

最後に夜の食事は、外国人はビアホールで食事を兼ねてビールを飲み、仲間と長時間にわたって話をしている。私も100年前から続いているビアレストランで、チョット一杯と食事をした。インターナショナルなので色々な国の人々と話す機会があり楽しい雰囲気を楽しむことが出来た。



何故、インドの話に記載するのに、インド料理の話がないの？

理由は、インドに着いた当初から朝・昼・夜3食カレーカレー攻めにあり、1週間後カレー味が鼻につき拒否反応が出ましたので日本食もどきで食べていました。日本食美味しいでした。